心理学的原初としての生得性

薄井尚樹

1. はじめに

私たちの髪の色や、あるいは、ある決まった時期になると歯が生えてきたりすることは、生得的(innate)だと一般には思われている。では、私たちの心に生得的なところがあるとはどういうことなのだろうか。

本稿では、心の生得性にたいするひとつの特徴づけをとりあげる。それによると、ある心的アイテム[1]が生得的であるとは、それがどのように獲得されたかについて、心理学的な説明を与えることができないことだとされる。それゆえこの立場によると、生得的な心的アイテムは、心理学的原初(psychological primitive) とみなされることになる。こういった特徴づけは、以下で見るように、生得主義と経験主義の対立図式において、多くの論者が暗黙のうちに採用してきたものだ。本稿の目的は、生得性についてのこの特徴づけにどのような前提が潜んでいるのかを明らかにし、そのうえで、心の生得性を理解するためにとるべき道筋を示すことにある。

本稿は以下のように進行する。まず、生得主義と経験主義の対立図式から、「心理学的原初としての生得性」というアイデアがどのようにしてもたらされるのかを考察する（第2節)。つぎに、このアイデアが機能するためには、心と身体の因果関係について、ある強い想定がなされてなくてはならないことを論じ、このアイデアに与する現代の論者が、この想定の重要性を適切に評価できていないことを明らかにする（第3節)。最後に、以上の議論が、心の生得性に独自性を認めることができるかという、より大きな論点とつながっていることを示す（第4節)。

2. 心理学的原初としての生得性

生得性とはなにかを考えるためのひとつの方法は、生得主義と経験主義の対立の構図を見てとることだ。長い歴史を持つこのふたつの立場は、どのような種類の心的アイテムが心の生得的な部分を構成するか、ということを主題とする。この対立はふたつの観点から定式化されうる。第一の観点は、生得的なアイテムの豊かさに関わるものである。単純に述べると、生得主義は、経験主義が想定するよりも遙かにたくさんの生得的なアイテムがあると主張する。たとえば、以下で見るように、ジェリー・フォーダーの概念生得主義(Fodor,

1975, 1981)は、ほぼあらゆる語彙概念が生得的なものだと考える点で、概念についての経験主義が想定するよりも遙かに多くのアイテムを生得的なものだとみなしている。第二の観点は、その対立を、領域特異性と領域一般性の区別にもとづけるものである。私たちが日常的に直面するさまざまな問題を考えてみよう。それはたとえば、投げられたボールがどのような軌道を描くかを予測することであったり、一定の状況にある他者に心的状態を帰属させることであったり、あるいは、ある平叙文をそれに対応する疑問文に書き換えることであったりする。これらの諸問題は、（素朴）心理学・（素朴）物理学・統語論というように、それぞれ独自の概念や原理を伴う別個の諸領域に該当すると考えることができる。生得主義によると、心の生得的な部分には、こういった個々の領域に特有のものが含まれ、さらにそれは、それぞれの領域の抽象的な部分にまで及ぶとされる。他方で経験主義は、生得的な部分が、感覚器官と密接に結びついたものに限られるか、あるいは帰納のメカニズムのように、諸領域を横断して一般的に適用されるようなものだと考えるのである。

このような対立図式から分かるように、経験主義でさえ、一定の心的アイテムが生得的であることを許容する。それではなぜ、生得的な心的アイテムは存在しないという、ラディカルな経験主義を主張することができないのだろうか。ここでしばしば、つぎのような議論が用いられる(たとえば Block, 1981, p. 279; Chomsky, 1975, p. 13, 邦訳 20 頁)。ある心的アイテムがなんらかの学習メカニズムによって獲得されるとしてみよう。このとき、そのメカニズムじたい、生得的なものであるか、そうでないかのいずれかであるはずだ。しかし、そのメカニズムも学習されたものだとすれば、ラディカルな経験主義は、そのメカニズムがさらに別の（おそらくより汎用的な）学習メカニズムによって獲得されたと考えなくてはならなくなる。つまり、ラディカルな経験主義は、獲得プロセスの説明において循環か無限後退に陥ることになるのである。そのような事態を避けるためには、ラディカルな経験主義でさえ、最低限の生得性を許容しなくてはならない。じっさい W・V・クワインのように、徹底した経験主義者でさえ、きわめて汎用的な学習メカニズムが生得的だとする考えに「承知のうえで、しかもみずからすすんで」(Quine, 1969, p. 95)関与するのである。

この議論じたいはとてもシンプルなものだが、そこから、生得的であるとはどういうことかについて、ある考えがもたらされる。すなわち、なにかが生得的であるとは、その獲得プロセスが心理学的に説明できないことを意味しているという考えである。その一例として、フォーダーが概念生得主義を論じるさいに用いる考察を挙げることができる。彼は、概念の生得性／非生得性の区別が、その獲得プロセスにおける入力（経験）と出力（獲得される概念）の関係に帰着すると考える。たとえば、「白いイヌ」という概念がどのように

して獲得されるかを考えてみよう。標準的な心の表象理論にしたがうと、この概念は、「白い」と「イヌ」という、より基本的な概念から構成される。そしてその獲得には、このような内部構造に関する仮説が伴うとされる。すなわち、「白いイヌ」という概念は「白い」と「イヌ」の双方の概念に当てはまる存在者に適用される、という仮説である。私たちはそういった仮説を形成し、それを証拠となる経験と照らし合わせてテストすることで、問題の概念を帰納的に学習するとされるのである。この意味において、学習可能な概念と経験とのあいだには因果的かつ合理的（証拠的）な関係が成り立つと考えられる。しかし、「白い」や「イヌ」のように、それ以上に分割可能な内部構造がない概念の場合、仮説の形成・テストによる学習という説明だと循環に陥ることになる。それゆえ、概念になんらかの内部構造がないかぎり、私たちは仮説の形成・テストを通じてその概念を学習することはできない。つまり、内部構造を持たない概念は生得的だと結論されるのである。このように、生得的な概念の獲得プロセスにおいては、経験とそこから生じる概念とのあいだの関係を、合理的な関係としてあらわすことができない。フォーダーはそれが完全に恣意的なものでありうると指摘する(Fodor, 1981, p. 280)。つまり、一定の経験が原因となって私たちの心にある概念が生じる理由にたいして、心理学的な説明を与えることができず、それらの関係は純粋に因果／法則的なものだと論じられるのである。

リチャード・サミュエルズは、一連の論文(Samuels, 2002, 2004, 2007)を通じて、生得性についてのこのような考えを明確にし、それを心的アイテム一般へと拡張した。彼は生得性を心理学的な原初性と同一視し、後者の考えを以下のように説明する[2]。

> ある心理学的構造 S･･･［中略］･･･が心理学的原初であるのは以下の場合に限られる。
> 1. S はなんらかの正しい科学的心理学の理論によって措定される構造であり
> 2. 正しい科学的心理学の理論で、S の･･･［中略］･･･獲得を説明するようなものは存在しない。(Samuels, 2002, p. 246)

このように、サミュエルズは、心の生得性にまつわる問題を、科学的心理学の射程についての問題に置き換える[3]。この定式化が、先に見た生得主義と経験主義の対立図式にうまく重なることに注意しよう。生得的な心的アイテムがどのように獲得されるかについて、なにか他の心的アイテムを引き合いに出すような心理学的説明を与えることはできない。というのも、そのような説明が可能だとしたら、獲得プロセスは無限後退か循環に陥ることになるからだ。

ガブリエル・シーガルが指摘するように、生得性についてのこのような特徴づけは、一

定タイプの説明（心理学的説明）の利用可能性を否定する点で、ネガティブなものだ(Segal, 2007, p. 91)。しかし先に見た生得主義と経験主義の対立図式は同時に、そこから派生的にもたらされる、生得性のポジティブな側面も示唆する。すなわち、生得的なアイテムは、他の生得的でないアイテムの獲得を説明する際の基盤、いわばそういったアイテムの獲得に伴う土台(building block)としての役割を果たす、という考えである[4]。たとえばバーバラ・ランダウは、自分の現在位置を認識する(dead reckoning)ためのメカニズムをとりあげて、生得性のそのような側面を強調する(Landau, 2009)。彼女の挙げる例はつぎのようなものだ。サバクアリは、餌を獲得するために、回り道をしながら巣から遠く離れたところまで探索する一方で、餌を見つけたら最短距離で巣へと戻ってくることが知られている。それゆえ、こういったアリは、探索のあいだずっと、巣に相対的な方向と距離を計算し、それによって自分の現在位置についての表象を獲得しているのでなくてはならない。そしてランダウは、このような一連のプロセスが進行しうるためには、その土台になにか生得的なアイテムがなくてはならないと論じる。

> このアリの行動の根底にあるメカニズムは、経路統合（方向と距離の通時的な統合）であり、それによって、巣に相対的な現在位置が刻々と記録されることになる。このメカニズムのおかげで、アリは、これまでに辿ってきたルートからして、自分が巣に相対的にどこにいるのかを学習できるし、その表象を用いて、巣に戻るための正しい道筋を毎回導き出すことができる。このメカニズムは、そのアリにとっての土台だと適切に理解されうる。つまりそれは生得的なメカニズムであり、アリはそれを用いて、探索中に距離と方向を測定することで、自分がその時々においてどこにいるのかを学習するのである。 (Landau, 2009, p. 89)

先に見た生得主義と経験主義の対立図式によると、生得的でないということは、その獲得プロセスになんらかの心的アイテムが伴うということにほかならない。そして、そのような心的アイテムの獲得プロセスをたどっていくと、最終的には、それ以上心的アイテムがその獲得に伴わないようなもの、すなわち生得的な心的アイテムに行き着かなくてはならない。この意味において、生得的な心的アイテムは、それ以外の心的アイテムを享受することを可能にする土台だとみなされるのである。上記の事例に当てはめて考えれば、そのように機能する生得的アイテムこそ、経路統合のメカニズムである。つまりそのメカニズムのおかげで、巣に相対的な自分の現在位置を表象したり、それを用いて巣へと正確に戻るルートを推論したり、そういったさまざまな認知プロセスが可能になるとされるのであ

る。

3. 生得性と心身問題

これまで見てきた「心理学的原初としての生得性」というアイデアは、さまざまな論者が暗黙のうちに想定してきたものだ。しかしこの考えは、心と身体の関係について、ある重要な考えを前提としなければ機能しない。では、そこではどのような考えが前提とされているのか。そのことを明らかにするために、生得性という概念の理論的な有用性を否定する立場と対比することからはじめよう。

先に見たように、経験主義と生得主義の対立は、私たちの心の生得的な部分の位置づけを主題とする。しかしジョン・スペンサーと彼の同僚たちは、生得性という概念それじたいを問題視し、生得主義と経験主義という対立図式に代わる、発達科学のための新たな枠組みを提供しようとする(Spencer et al., 2009)。そこで焦点が当てられるのは、どのようなアイテムを生得的に持っているかということよりむしろ、どのような発達プロセスが生じているかということである。発達に伴う変化は、複雑なプロセスの産物であり、そこには複数のレベルの（遺伝的・生理的・心理的といった）因果が関わることになる。しかし、生得性という概念は、このような発達プロセスを理解するのに役立たない。というのも、「(心理学的）原初としての生得性」というアイデアは、「他のいかなるものからも発達することはないし、導出もされない」(Spencer et al., 2009, p. 79)ということを意味するにすぎないからだ。つまり、生得性とは本質的に静的な概念であり、スペンサーたちが想定する新たな枠組みのもとでは果たすべき役割がないとされるのである。

このような立場に対して、ランダウは、発達という考えそれじたいが、「(心理学的）原初としての生得性」という概念を前提としていることを強調する。

> 発達システムに原初的なものを措定することについて、スペンサーたちはとりわけ不安を抱いている。自分たちの立場は変化というものを重視するのだから、独自の土台を特定しなくてもよいと信じているらしい。しかし彼らは実際には、そういったものを特定しているのである。 - どんな理論も原初的なものからはじめなくてはならない。そういったものが特定されないと、変化のメカニズムを特定できない。というのも、そういった変化は、原初的な土台にたいして生じるからである。･･･［中略］･･･土台を無視することができないのは、説明されるべき変化が実際にあるからにほかならない。それどころか、その土台がどういうものかを同時に特定しているのでなければ、変化を説明することはできないのである(Landau, 2009, p. 89)

この論点を示すために、ランダウは、先に見たサバクアリの帰巣行動について近年なされた実験(Wittlinger et al., 2006)を引き合いに出す。そこでは、足の長さを人工的に変えることで、アリの帰巣行動にどのような影響がもたらされるかが調べられる。それによると、餌を見つけて巣に戻る前にその足を人工的に長くされたアリは、それによって歩幅が伸びて、距離を長く見積もってしまい、本来の巣の位置を通り過ごしてしまう。逆に、そのさいに人工的に足を短くされたアリは、距離を短めに見積もり、巣にまでたどり着かない。しかしこのように足の長さを変えられたアリは、餌を求める旅を新たにはじめる際には、その足の長さに対応した調整をなす。この実験結果が示すように、経路統合のメカニズムには、脚の長さに応じた変化が生じうる。しかし、そのような変化について語ることがそもそも意味をなすためには、その変化の出発点を設定しなくてはならない。ランダウはそれこそが土台とされるものであり、生得性の概念において捉えられるものだと考えるのである。

ランダウの主張は「心理学的原初としての生得性」というアイデアを評価するための、ある重要な論点を示唆している。彼女が「どんな理論も原初的なものからはじめなくてはならない」とコメントしていることに注意しよう。一定の説明の枠組みのなかでは、なにか原初的なものを決めておかないと、その説明が循環や無限後退に陥ってしまう。第 2 節で見たように、このことから、経験主義でさえ最低限の生得性を認めなくてはならないと結論づけられた。しかしここで示されているのは、理論ごとに、別々の土台にもとづいて別々のプロセスが説明されるという、きわめて一般的な論点にすぎない。たとえば、「外で雨が降っている」といった、私たちが日常的に獲得している信念を考えてみよう。この心的アイテムの獲得に関わる因果関係をさかのぼっていくと、心理的・生理的・遺伝的な、さまざまな要因があらわれて、それらが全体としてなんらかの連鎖を構成することになる。そしてその連鎖がどのようなものかを明らかにするために、さまざまな説明が関与し、それぞれがなんらかの原初を設定することになるだろう。それではなぜ、この獲得に至る連鎖において、心理学的な土台だけが生得的だとみなされうるのだろうか。つまり、「心理学的原初としての生得性」というアイデアに与する論者は、つぎの問いに答えなくてはならないように思われる。

なぜ獲得に至る連鎖において心理学的原初だけが生得性の帰属に関わるのか

そしてこの問いに答えるためには、心理学の研究対象が、なんらかの意味で他の分野の研究対象から自律したものであることを示さなくてはならない。それでは、どのようにして

そういったことを示しうるのだろうか[5]。

私たちはこのような問いを、心身問題のヴァリエーションとみなすことができる。このことを見るために、まず、生得性という考えと心身問題のつながりについてのフィオナ・カウィ(Cowie, 1999)の考察を検討することにしよう。

第 2 節で見たように、経験主義は、少なくともひとつの心的アイテムが生得的であることを認めなくてはならない。したがって、私たちの心になんらかの生得的な部分があることを、完全に否定することはできない。それとは対照的に、カウィは、哲学の歴史を振りかえると、経験主義の可能性を完全に否定するようなタイプの生得主義がしばしばあらわれてきたと言及する。この立場においては、「私たちの心にあるものはすべて生得的でなくてはならない」(Cowie, 1999, p. 49)という、ラディカルな主張がなされることになる。

カウィは、この背景に、心と身体の因果関係をめぐる謎があると指摘し、その一例としてデカルトに言及する。たとえば彼女は、デカルトにとってその謎がつぎのようなものだったと考える。私たちがある対象を見て色や音の観念を持つ場面を考えてみよう。そこで生じているのは、私たちの感覚器官の活性化や脳の物理的興奮といった、一定の物体的な運動であり、これらを除くと、外的な対象から私たちの心にやってくるものはなにもない。他方で、私たちは色や音や苦痛といったさまざまな観念を実際に持つことができる。それではなぜ、それに先行する物体的な運動となにも類似するところがないのに、私たちはそれらの観念を持つことができるのだろうか。

この謎が示唆するのは、私たちが実際に持っているような心の内容がなぜ生じるのかについて、外的世界との因果関係の観点から説明を与えることはできない、ということだ。一定の経験が原因となって一定の心的アイテムが生じることは、それ以上の説明を加えることのできない、いわばなまの事実だとみなされるのである。たとえばカウィはこの論点をつぎのように説明する。

> ･･･心と世界の相互作用は自然の秩序内で生じることだが、それは説明を与えることのできない - 実際には考えることもできない - もので、それじたいをそのまま取りあげるほかないのである。心と身体は因果的に相互作用し、私たちはそのことを知っている。しかし、それ以上のことについて、私たちにはなにも述べることができないのである。(Cowie, 1999, p. 63)

それゆえ、生得性という考えは、心的アイテムの獲得プロセスが端的に説明不可能であるという認識を反映するものだと述べられることになる。つまり、このタイプの生得主義は、

「信念や概念の獲得についての、自然主義的な、広い意味で科学的な理論を展開する見込みに関する、深刻なペシミズム」(Cowie, 1999, p. 60)に帰着するのである。

このようなカウィの考察を考慮に入れたうえで、もういちど先の問題を考えてみよう。なぜ、生得性の帰属においては、他の理論的原初よりもむしろ心理学的原初に注目しなくてはならないのだろうか。ここで、「心理学的原初としての生得性」というアイデアの基盤に、カウィの論じるようなラディカルな生得主義があるとしてみよう。すると、この問いに対する答えは明白なはずだ。それはまさに、心理学的原初とそれに先行する心的でないアイテムとのあいだの因果関係が「特殊なものであり、純粋に物理的な因果関係･･･［中略］･･･や純粋に心的な因果関係･･･［中略］･･･とのアナロジーにおいて理解されうるものではない」(Cowie, 1999, p. 63)からにほかならないのである。

しかし、「心理学的原初としての生得性」というアイデアに与する現代の論者で、心身問題について、このように強い前提を保持するものは、ほとんどいないように思われる。たとえばサミュエルズは、自身の考えに、端的な説明不可能性という論点が伴わないことを強調する(Samuels, 2002, p. 249)。第 2 節で見たように、サミュエルズにとって、「心理学的原初としての生得性」というアイデアは、その獲得についての心理学的説明が利用できないことを意味するのであって、端的な説明不可能性を意味するわけではないのである。

しかし、説明不可能性という考えをこのようなかたちで弱めてしまうと、なぜ（他の理論的原初ではなく）心理学的原初が生得性の帰属に関わるのか、という問いに答えることができなくなる。カウィが指摘するように、この問いに答えるためには、心理学的原初とそれに先行する心的でないアイテムとのあいだの因果関係が、他の物理的ないし心的な因果関係とどのように異なるのかを示さなくてはならない。しかし、心理学的説明の利用不可能性という論点に依拠するだけでは、このことを示すことはできない。たとえば、日焼けのような明らかに生得的ではない、生物学的なアイテムを考えてみよう。このようなアイテムの獲得についても、心理学的な説明が利用できないのは明らかだ。したがって、マッテオ・マメーリとパトリック・ベイトソンが指摘するように、心理学的説明の利用不可能性という論点だけでは、あらゆる生物学的なアイテムにも同じようにあてはまってしまう(Mameli & Bateson, 2006, p. 167)。ではなぜ、同じタイプの説明が利用できないにもかかわらず、一方のアイテムには生得性の帰属が関わり、他方のアイテムには関わらないのだろうか。

もちろん日焼けのような生物学的アイテムは、定義上、科学的心理学の理論によって措定される構造ではない。それゆえ、第 2 節で見たサミュエルズの定式化にしたがえば、そういったアイテムは端的に考察の対象から外れてしまうのだ、と応答されるかもしれない。

しかし、そのような応答は現在の問いを考察するうえでは役に立たない。というのも、いま問題になっているのはまさに、なぜ私たちは生得性を考えるにあたって科学的心理学の理論（およびその対象）に注意を制限しなくてはならないのか、ということだからだ。そして、心理学的原初というアイデアだけに依拠してこの問いに答えようとすると、心身問題についてかなり強い想定が必要になるように思われるのである。

4. おわりに

ノーム・チョムスキーは、言語を用いる私たちの能力を、身体器官になぞらえて「心的器官(mental organ)」と表現し、その生得性を強調する(たとえばChomsky, 1980)。このことが顕著に示すように、心の生得性はしばしば生物学的アイテムの生得性と類比的に捉えられてきた。このような戦略の背景にある考えを、スティーヴン・ローレンスとエリック・マーゴリスはつぎのように説明する。

> 「生得的」とは理論的な用語であり、それ以外の理論的な用語と同じように、ターゲットとなる現象を理論化する過程でしか、それを明らかにすることはできない。しかし、事態がどこに向かっているのかをひとまず理解するために、いくつかの範例的な事例に目を向けることは可能である。私たちに腕、足、心臓、肝臓といったものがあることは、明らかに私たちの生得的資質の一部をなしている。対照的に、傷や髪型といったものは生得的ではない。これらの事例は、生得性についてのしっかりした分析の代用品とはならないかもしれないが、それによってなにが問題になっているかをうまく理解することはできる。また同時に、なにが問題ではないかについても、それをさらに明確にしてくれるのである。(Laurence & Margolis, 2001, p. 220)

しかし本稿で見てきた「心理学的原初としての生得性」というアイデアが正しいとすれば、このような戦略は端的に成り立たないことになる[(6)]。心理学的な説明不可能性という論点だけでは、日焼けのように、明らかに生得的ではない生物学的アイテムも、生得的とみなされてしまうことを思い出そう。「心理学的原初としての生得性」というアイデアが機能するためには、生得性という概念が、心の生得性だけに適用可能なひとつの意味を持つか、あるいは、心の生得性と生物学的な生得性のそれぞれに当てはまる、ふたつの別個の意味を持つのでなくてはならない。つまり、心の生得性になんらかの独自性を確立することが求められるのである。

心の生得性の独自性という論点は、生得性概念をめぐる現在の状況を鑑みると、それじ

たい検討に値するものだ。生得性という概念は近年、とりわけ生物学的アイテムへの適用可能性について、激しい批判にさらされてきた。ところが、その一方で、生得的な普遍文法やコア知識(たとえばSpelke & Kinzler, 2007)という考えに示されるように、心的なアイテムを扱う分野では、いまだにその理論的な有用性が根強く信じられている。それゆえ、心の生得性の独自性が確立されうるとすれば、生物学において生得性という概念の理論的役割が急速に衰えつつあるのに対し、なぜ心を扱う学問分野では依然としてその概念が有効だと思われるのかを説明することになるだろう。しかし、「心理学的原初としての生得性」というアイデアは、そのような非対称性がなぜ成り立たなくてはならないかを説明するために、心身問題についてかなり強い形而上学的前提を要求するのである。

註

(1) クオリア、信念、概念、モジュールというように、さまざまなタイプの存在者が私たちの心に措定されうるが、本稿ではそれらを総称して「心的アイテム」と呼ぶことにする。

(2) サミュエルズは、このような心理学的な説明不可能性の条件に加えて、脳の損傷によってもたらされる幻覚のような反例を扱うために、標準性条件を加える。それによると、考察の対象となるアイテムは標準的な過程を経て獲得されたものでなくてはならないとされる(Samuels, 2002, p. 259)。

(3) 「正しい科学的心理学」とはなにかという問いについて、サミュエルズはいかなる特定の立場にも関与しない(Samuels, 2002, p. 253)。むしろ彼の意図は、正しい科学的心理学がどのようなものだと判明するにせよ、その枠組みにおいて原初的なものが生得的なアイテムだとみなされなくてはならない、ということにある。

(4) 以下ではランダウの議論をとりあげるが、サミュエルズも同様の指摘をなしている(Samuels, 2002, p. 256)。

(5) ロン・マロンとジョナサン・ワインバーグ(Mallon & Weinberg, 2006)がサミュエルズの主張を論じる際になす考察は、この問いに対して、カウィとは別の答えを与えるものだとみなすことができる。それは、心理学の研究対象が全体として「自然種」を形成するというものである。しかし彼ら自身が指摘するように、そのように答えることができるためには、心理学の研究分野がある単一のモデルによって支配されるという、ありそうにない想定をなさなくてはならない。

(6) それにもかかわらず、サミュエルズ自身がときに、生物学的アイテムとのアナロジーという戦略に依拠しているように思われる。たとえば、ある心的アイテムが生得的であるとは、それが誕生時に現れることだという考えを批判するにあたって、彼はつぎのように述べる。

> ･･･生得的な特徴は、発達のきわめて遅い時期に･･･［中略］･･･獲得されることもある。この論点は一般に、非心理学的な性質で、生得的だが明らかに誕生時には現れることのないもの･･･［中略］･･･とのアナロジーによって主張される。認知科学における生得主義者によると、形態学的形質に適用されることは、同じように心理学的形質にも当てはまるのである(Samuels, 2004, p.137)

文献

Block, N. (1981) ‘Introduction: What Is Innateness?’ in N. Block (Ed.), *Readings in the Philosophy of Psychology* (pp. 279-281), London: Methuen.

Chomsky, N. (1975). *Reflections on Language*, New York: Pantheon Books. (1979, 井上和子・神尾昭雄・西山佑司共訳,『言語論――人間科学的考察』, 大修館書店.)

――― (1980). *Rules and Representations*, New York: Columbia University Press. (1984, 井上和子・神尾昭雄・西山佑司共訳,『ことばと認識――文法から見た人間知性』, 大修館書店.)

Cowie, F. (1999). *What’s within: Nativism Reconsidered*, New York: Oxford University Press.

Fodor, J. (1975). *The Language of Thought*. New York: Crowell.
——— (1981). 'The present status of the innateness controversy' in *Representations: Philosophical Essays on the Foundations of Cognitive Science* (pp. 257-316), Cambridge. Mass.: MIT Press.
Landau, B. (2009). 'The Importance of the Nativist–Empiricist Debate: Thinking about Primitives without Primitive Thinking', *Child Development Perspectives, 3*, 88-90.
Laurence, S., & Margolis, E. (2001). 'The Poverty of the Stimulus Argument', *British Journal for the Philosophy of Science 52*, 217-276.
Mallon, R., & Weinberg, J. (2006). 'Innateness and Closed Invariance', *Philosophy of Science, 73*, 323–344.
Mameli, M., & Bateson, P. (2006). 'Innateness and the Sciences', *Biology and Philosophy, 21*, 155-188.
Quine, W. (1969). 'Linguistics and Philosophy', in S. Hook (Ed.), *Language and Philosophy: A Symposium* (pp .95-98), New York: New York University Press.
Samuels, R. (2002). 'Nativism in Cognitive Science', *Mind and Language 17*, 233-265
——— (2004). 'Innateness in Cognitive Science', *Trends in Cognitive Science, 8*, 136-141.
——— (2007). 'Is Innateness a Confused Concept?', in P. Carruthers, S. Laurence & S. Stich (Eds.), *The Innate Mind: Foundations and Future* (pp. 17-36), Oxford: Oxford University Press
Segal, G. (2007). 'Poverty of Stimulus Arguments concerning Language and Folk Psychology', in P. Carruthers, S. Laurence & S. Stich (Eds.), *The Innate Mind: Foundations and Future* (pp. 90-105), Oxford: Oxford University Press
Spencer J., Samuelson, L., Blumberg, M., McMurray, B., Robinson, S., & Tomblin, J. (2009). 'Short Arms and Talking Eggs: Why We Should No Longer Abide the Nativist–Empiricist Debate', *Child Development Perspectives, 3*, 79-87.
Spelke, E. & Kinzler, K. (2007). 'Core Knowledge', *Developmental Science, 10*, 89-96.
Wittlinger, M., Wehner, R., & Wolf, H. (2006). 'The Ant Odometer: Stepping on Stilts and Stumps', *Science, 312*, 1965–1967.

〔シェフィールド大学大学院博士課程・哲学〕